



けすぞう新聞

2018年12月発行
NO.12
播磨町消防団女性分団

1995年のあの時を振り返って



阪神・淡路大震災から24年です。

11月滋賀県で開催された全国女性消防団員活性化大会後の情報交流会でのお話です。滋賀県甲賀市消防団女性消防隊のみなさんが「食べよう 語ろう 引き継ごう 毎月17日は防災おにぎりデー」と称して活動していることをお聞きしました。女性消防隊のfacebookには「阪神淡路大震災を風化させない事が、おにぎりデーの目的でもあり、その事で学んだ経験を、備えにして行かなくてはなりません。特別な企画はありませんが、この日を原点に、これからも防災おにぎりデーを、広めて行きたいと思います。」とありました。



震災の影響のなかった滋賀県の方が素晴らしい活動をする中、何かお役に立てないかと考え、あの時、目にしたことをお伝えしようと思います。

震災当時、高校3年生。淡路島の自宅は全壊でしたが運よく隣家をお借りすることができ、神戸市の大学まで毎日、フェリー・バス・電車を乗り継いで通学していました。大学のグラウンドにはプレハブの仮設教室が建設されており、思い出の半分はプレハブ校舎です。ただ、大学生活よりも心に残るのは、通学電車からの車窓でした。

赤茶色、黒、青の世界

通学路は被害が最も大きかった東灘区から須磨区。延焼拡大し、大規模火災となった神戸市長田区周辺では、赤茶けた土地が広がり、すすけて黒くなった電柱、ポツリポツリと残る家が見えていました。中央区に近づくと徐々にビルが増えてきます。傾いたビル、1階がつぶされて2階になっているビル。火災の影響がなかった地域に入ると、屋根瓦が落ちてブルーシートに覆われた青い屋根の家が広がっていました。少しずつ復興したはずですが、私の心に残る通学風景は「赤茶色、黒、青」ばかりが残っています。

まるで作られた映像を見るような世界が、24年前、実際に存在していたのです。

今、震災の爪跡はほとんど見られなくなっており、震災を知らない世代が増えています。震災をしっかりと語り継ぐことの必要性を感じながらも、実際に震災を体験していない人々にどう伝えていくべきかという難しさも感じます。反面、あの時の思い出をあまり詳しく語ることに抵抗も感じます。

ただ、この記事を目にすることで、震災について考えるきっかけになればと思います。

もしもの時を考えて、私たちが住んでいる場所がどのようなところか今一度確認しましょう。災害が起きた時ではなく、起きる前に、どのように行動すれば良いか考えてみましょう。播磨町のホームページにはいろいろな災害に合わせた防災マップや避難経路分析図が掲載されています。一度、ご確認ください。



阪神淡路大震災から学ぶ「通電火災」 (2018年1月17日 ウェザーニュース より)

阪神淡路大震災では、古い耐震基準だった建物の倒壊、室内の家具の転倒に加え、火災の被害が目立ちました。それは『通電火災』が原因だったと言われます。大地震が発生した際は、広範囲で停電が発生する可能性があります。このときブレーカーを落とさずに外へ避難すると、電気が復旧した際に地震で倒れていたたり、家具の下敷きになっていた電気製品が再び作動。これが火元となって起こるのが、通電火災です。阪神淡路大震災では原因が特定された建物火災の約6割が、通電火災だったといわれます。

対策はたったひとつ、元を断つことです。電気が復旧しても、通電しないように「ブレーカー」を落として避難すれば通電火災は防げます。最近の暖房器具は倒れたら起動しないような安全装置がついていたり、揺れを感知してブレーカーが自動で落ちるような器具もそろっています。

ただ、万が一のことを考え、避難時は慌てて外に出る前に、「ブレーカー」をOFFにしてください。

避難前の「ブレーカーOFF」が通電火災を防ぐ